祝辞

一般社団法人木の総合文化・ウッドレガシー推進協議会
会長　原口 博光

東京建具協同組合が令和元年6月24日に創立90周年を迎えられましたことを衷心よりお慶び申し上げます。9は1にして、総ての始まりなりという名言があるが如く、90周年は未来に向けて更なる貴組合の団結力と一体感を高め、多様化する社会・お客様のニーズに寄添い、信頼され、地域社会そして日本になくてはならない存在としての産業を目指し、力強く発展する新たな出発であると想っております。

2019年5月1日に皇太子さまが天皇に即位され、平成から令和へと新らしい時代が始まりました。令和元年6月、貴組合と（一社）全国建具組合連合会が（一社）木の総合文化・ウッドレガシー推進協議会と協力して、ウッドレガシー議員連盟に要望書を提出いたしました。当該協議会は建具産業の社会的立ち位置が地球規模で取り組まなくてはならない「地球温暖化防止・削減」が木製建具業界の成長産業化と密接に関わっていると謂う命題に着目することです。当該要望書の1項目は「日本標準産業分類」の見直しです。製造業の中分類に「建具・装備品製造業」、建設業の小分類に「建具工事業」と明記することが、「ESG」の観点から、社会的認知度を高め、木製建具の長期的成長に繋がります。

若者が「ものつくり」の職業に就職できる環境整備は高校教育の進学カリキュラムに職業訓練校への進学を推奨し、日本の若者が労働分布の弱点を緩和する為には、「国の施策と指導」が肝要です。木製建具に関わる職人の技能、技術は木材加工に於いて、トップレベルに位置します。住宅以外の公共施設、ホテル、店舗等々、木の調湿、暖かさ、憩いがウッドレガシーとして、再認識され、「Wood is Good」が再生可能資源として、「植える為に伐る」という国是と一体化し、循環社会の構築が国土強靭化と環境に貢献します。

木製建具は循環社会の重要な産業の位置にあります。木製建具はLCA評価に於いて、他材料と比較して、その生産から建設までCO2排出量が極めて少ないことが報告されています。日本の森林率は67%で、世界第2位です。1950年代の木材使用禁止から、2000年代の森林吸収源対策として、日本産材利用の新時代が到来しました。低炭素社会を目指して、木材利用の図ることを世界にコミットして、2020年東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。この最高の時に、環境（E）と社会（S）と人（H=G）に優しい木製建具産業のPRを日本のみならず世界に向けて、「木の総合文化・ウッドレガシー」を発信するイベントが2020年3月、東京流通センター（TRC）で開催されます。

こうしたイベントを通して、大人から子供まで幅広く「木の総合文化」を伝え、国民に木を知って、身近に感じてもらうことが、木材の断熱性、保湿性、調湿など、私達の生理や情緒に作用することを知ってもらいたいと思っています。特に青少年が木に興味を持ち、将来、木に関わる職業を目指す人材育成に繋がっていけば幸いです。「持続可能な社会」の実現に向かって、木製建具産業とウッドレガシー推進協議会が連携、協議を行い、日本材の振興を図り、成長産業化する政策の樹立及びその効果的実施について、貴組合と共に提案していきたいと思っています。末筆になりますが、90周年を迎え、東京建具協同組合及び組合員の皆様の益々のご健勝とご活躍・ご繁栄を心からご祈念申し上げまして、私の祝辞とさせていただきます。

海外の木材研究科が見る日本の建具の魅力

国際木文化学会（International Wood Culture Society・略称ＩＷＣＳ）の特別研究員兼オペレーションマネージャーを務めるシャーロット・チャーファー・リー氏（Charlotte, Chia-Hua Lee）は世界各国で現地の木の文化を研究し、木材の祭典である「ワールド・ウッド・デー」を推進してきた。世界の木文化に触れてきたシャーロット氏の目に日本の建具はどのように映るのか、海外からの視点を通して建具の可能性を探る。

国際木文化学会
特別研究員兼
オペレーションマネージャー
シャーロット・
チャーファー・リー氏

—最初にシャーロットさんの所属組織である国際木文化学会（以下、ＩＷＣＳ）の活動、特に世界各国の木の文化を発信するワールド・ウッド・デーの活動について聞かせてください。

シャーロット

ワールド・ウッド・デーの構想は2011年から始まりました。当時、ＩＷＣＳでは、何かしらかのイベントを行って大衆から注目を受けなければ、木の文化を推進することはできないと考えていました。2013年3月21日から1週間、ダンザニア連合共和国のダルエスサラーム市で初めてワールド・ウッド・デーを開催しましたが、木材産業の関係者が多数参加し、特に木彫刻の職人や木工教室の先生と生徒が集まり、最終的にはダンザニア政府の農林関係者の協力を得ることができました。この時の経験から、イベントの実現にはＩＷＣＳのスタッフのみならず、開催地の人々の協力も必要であるということを学びました。以降、ワールド・ウッド・デーを毎年別な国で開催していますが、その目的は開催国の木の文化を世界中に発信すること、これが一番重要なことであると感じています。

—第1回目をタンザニアで開催した理由は何でしょうか。

シャーロット

2012年の夏、アフリカ4カ国で木彫刻のコンテストを開催しました。これは2013年に行うワールド・ウッド・デーの事前調査を目的とした実験だったのですが、モロッコ、ベナン、カメルーン、ケニアでコンテストを行い、選手との触

シャーロット・チャーファー・リー氏
Charlotte, Chia-Hua Lee

台湾・高雄市生まれ。2007年アメリカ合衆国ロサンゼルス市に設立したInternational Wood Culture Society（国際木文化学会）の特別研究員兼オペレーションマネージャー。

れ合いや当地の木工協会とのやり取りを通じて気付いたことは、文化の違いはあっても木という材料を大事に使うことによって、互いに共通の認識が形成されるということでした。

—ワールド・ウッド・デーの開催を通じて印象深かった点には、どのようなものがありましたか。

シャーロット

ワールド・ウッド・デーは第1回目のタンザニアを皮切りに、中国、トルコ、ネパール、アメリカ、カンボジア、オーストリアで開催してきました。各国で開催した結果、一番印象深かったことは、木に関わる多分野の人々が一緒になって木の良さ、木に関するコンセプトを一斉に発信できるという点です。どの国の大会においてもスタッフ、参加者、来場者が一体となって木の魅力を力強く伝えてくれました。もう一つ、各国で木のイベントを開催していると、言葉の壁も乗り越えられるということが挙げられます。もちろん通訳スタッフはいるのですが、木の文化に対する熱意は言葉に発しなくても伝わることを知りました。木彫刻、木製品の製造や木製楽器の演奏などパフォーマンスの熱意が言葉以上に雄弁になることがあります。

—日本の森林率は国土の約70%に当たります。古来、日本では木を生活の糧としてきた歴史がありますが、日本の木の文化をどう見ていますか。

シャーロット

私自身、ＩＷＣＳの仕事として日本に来たのは、2012年1月に「全国中学校創造ものづくり教育フェア・木工チャレンジコンテスト」を東京都江東区の木材・合板博物館で開催した時でした。日本の中学生達が4時間で一つの木工作品を製作するのですが、その技術力と加工の繊細さは見事であり、とても中学生の作品レベルとは思えない程に高度なものでした。日本では木材を使ったものづくりに関しても、しっかり教育されていると感

じています。このコンテストを契機に日本を訪れることが多くなり、寄木細工職人の取材や「木育」を展開する東京おもちゃ美術館の取材などを通じて日本の木の文化を知るようになりました。触れることで気付いたのは、日本の木の文化は奥深く、美的にも洗練されているということです。この日本の素晴らしい木の文化を世界に伝えていきたいと考えています。

—シャーロットさんの自国である台湾も木の文化があります。台湾では日本同様に木造建築が盛んなのでしょうか。

シャーロット

台湾出身の私から見ますと、日本に来て日本の木の文化に触れるまで、自国の木の文化をあまり実感していなかったのです。無論、台湾にも仏像彫刻などの木材加工の伝統技能はありますが、歴史的に見れば、台湾で木材を使うようになったのは日本から影響を強く受けたからです。台湾も日本と同じ地震国であり、耐震の観点から歴史的な木造建築物は少なかったのですが、第二次世界大戦前に日本が統治した時代、台湾の都市部にも木造建築が普及しました。日本の木造建築、木材加工技術には無駄がなく、木への感謝の気持ちが伝わってくると感じています。

—ＩＷＣＳの本部はアメリカ・ロサンゼルス市にありますが、アメリカにおける日本の木工技術の印象は、どのようなものなのでしょうか。

シャーロット

これは台湾だけでなくアメリカでも同様であり、アメリカの家具協会からも日本の木工職人は尊敬を受けています。ワールド・ウッド・デーに参加するアメリカの木工関係の方々も「是非、日本の木材加工技術と木の文化を学びたい」と口にしています。アメリカで活躍した家具デザイナーのジョージ・カツトシ・ナカシマ（日本名・中島勝寿）は今でもアメリカの家具業界の中では有名であり、彼の作品は高く評価されています。こうした影響もあって、アメリカの木工関係者の間では、日本に行って日本の木工技術を学ぶ機会を得たいと言う人が多数いるのです。

—日本の建具について質問します。建具、特に戸襖や障子といった和建具についての感想を聞かせてください。

シャーロット

日本の建具を知るようになったのは、

ものづくり・匠の技の祭典 2019 において東京建具協同組合は縦繁障子を製作した

3年前に東京建具協同組合を訪問した頃からでした。それ以前にもテレビ番組などで和室空間の建築を情報としては得ていたのですが、日本を訪れて建具組合の皆様から説明を受け、日本の建築の中で戸襖や障子などが様々な箇所で使われ、大きな役割を果たしているのだと知りました。建具には意識していない部分に徹底した技があります。建具は日本の文化を体現するものであると感じました。

—建具は現代建築においても大きな役割を持っているという認識ですね。

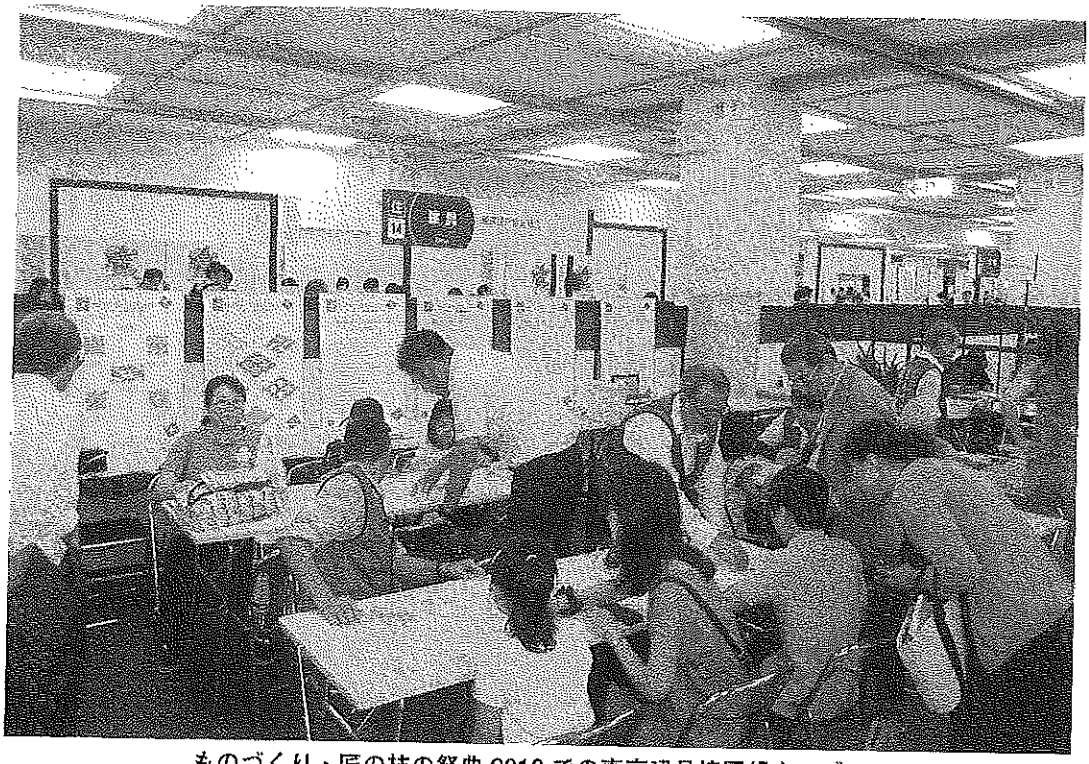
シャーロット

建具は現代の建築においてもレガシーとして使われています。例えば、ＪＲ九州のクルーズトレイン「ななつ星」でも車内の内装に組子細工が使われています。その組子細工の柄も多種多様であり、トータルとして一つの芸術作品として成り立っています。昨年開催されました「ものづくり・匠の技の祭典 2019」でも拝見しましたが、職人の技と精神を次世代につなげたいという強い思いを感じました。技という言葉は漢字の意味としては「秘術」や「秘訣」といった意味が含まれています。技は技術だけではなく心も含めた表現であり、日本の建具の細工は、まさに技における「秘術」が込められているものだと感じました。

—日本の建具を世界に広めようとした場合、解決すべき課題は何であると考えますか。

シャーロット

日本では見えない部分や気付かない部分にまで美を追求しており、その意識が日本の文化を形成しています。その文化



ものづくり・匠の技の祭典 2019 での東京建具協同組合のブース

から生まれた建具は世界にも受け入れられると思います。でも、どれが建具なのか、建具とは何を指すのか、その情報がなければ、建具の素晴らしさも理解できません。日本の建具が海外に進出していくには、製品や技術だけでなく文化をパッケージして伝えるべきです。技も大事ですが、使い方を伝えることも大事です。ホテルのロビーのインテリアに組子細工を使うなど、大勢の人が意識できるような建具の使い方を提示する、即ち「建具にはこういう使い方がある」という情報発信が必要になります。建具を開閉する間仕切りとしてだけではなく、住宅や公共の場におけるインテリアとしての使い方など、建具業界側からの提案があれば世界に広がっていくのではないでしょうか。

—建具業界の丁寧な情報発信が鍵という訳ですね。

シャーロット

例えば、絵師によって描かれた屏風などは芸術品であると思います。屏風は海外でのイベントでも注目されるでしょう。イベントに来場した海外のユーザーは「屏風とは何か」とか「屏風はどうやって使うのか」などの興味を持つことになります。その興味に応えていくことが建具を世界に広げていくことになると思います。現在、日本政府が日本の木造建築を海外に展開しようとしていますが、木造建築の推進の次は建具を推進するべきではないかと思います。建具は芸術品であり生活の用具でもあります。建具という魅力溢れる製品を、我々ＩＷＣＳも日本の若い世代と一緒に発信していければと考えています。

日本産材の利用で低炭素社会実現を
木材活用産業の展示＝提案

木の総合文化・ウッドレガシー推進協議会（LWCPC）は、IWCS（国際木文化学会）、WWDF（ワールド・ウッド・デー基金会）と共催で、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年3月21日（国連が定めた「国際森林デー」）を核として『ワールド・ウッド・デー2020東京～ウッドレガシー～木の総合文化展」を開催します。

2020年3月17日（火）～19日（木）　東京流通センター（TRC）

当協議会は産業展示として、日本産材利用による、建具、家具、木製サッシ、木製窓サッシ、不燃木材等の展示を予定しています。宮大工古式伝統保存会から聖徳太子以降の木の儀式を発信します。あわせて、海外の関係機関・団体との協賛、協力を得て、世界各地の木の文化に関わる工芸品、ドキュメンタリー等を紹介します。

2020年3月20日（金）～22日（日）　文京シビックセンター（東京）

IWCSのプログラムは木の音楽祭とコンサート、こども教室と木育、木彫 ショー、民族・伝統技術ワークショップ、国際青少年木工選抜プロジェクト、シンポジウム、写真とビデオ展示会等々の行事が行われます。

―本の総合文化・ウッドレガシー推進協議会の考え方―

2020年オリンピック・パラリンピック招致委員会は木材利用を公約して、東京五輪を招致しています。日本独自の「木の文化」を発信するショーウインドーとして、新国立競技場の建物は「杜のスタジアム」のコンセプトに則り、環境を重視した大会として、低炭素社会を目指し、木材の活用を図ることを全世界にコミットメントします。

■木の5大総合文化

○木を植えるために、伐る文化
○木を育てる文化
○木を適材適所に造材し加工し、使う文化
○森林の恵みをレジャーとして楽しむ文化
○自然の恵みに感謝をして神々にお祈りする文化を達成しよう

■川上・川中・川下の連携

■青少年に将来の夢を

■地球の温暖化削減と災害発生減少

■地震、台風の頻発国としての取組課題

■SDGs17項目

1. 貧困をなくそう
2. 飢餓をゼロに
3. すべての人に健康と福祉を
4. 質の高い教育をみんなに
5. ジェンダー平等を実現しよう
6. 安全な水とトイレを世界中に
7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに
8. 働きがいも 経済成長も
9. 産業と技術革新の基盤をつくろう
10. 人や国の不平等をなくそう
11. 住み続けられるまちづくりを
12. つくる責任つかう責任
13. 気候変動に具体的な対策を
14. 海の豊かさを守ろう
15. 陸の豊かさも守ろう
16. 平和と公正をすべての人に
17. パートナーシップで目標を達成しよう

一般社団法人　木の総合文化・ウッドレガシー推進協議会
〒174-0071　東京都板橋区常盤台4-13-3　日新興産㈱内
TEL:03-3550-6311　FAX:03-3550-6319